一　次の文を読んで、各問いに答えなさい。本文からぬき出す際にはふりがな（ルビ）はつけなくてよい。

京都の空はどうも柔らかい。頭上に広がる淡い水色に、綿菓子をちぎった雲の一片がふわふわと浮いている。（＊注１）鴨川から眺める空は清々しくも甘い気配に満ちている。①春から初夏にかけての何かはじまりそうな予感が、空の色にも溶け込んでいる感じ。凜が思いきり息を吸いこむと、水草が醸し出す川の香りが胸を満たした。

②家まで帰る途中に、凜は鴨川を渡る北大路橋を通り過ぎるだけでは飽き足らず、自転車を引いて河川敷まで降り、気に入りのいっとう広い木製のベンチに腰かけて空を見上げていた。投げ出した足の向こうには鴨川の清流がある。雨が降れば大量の川水を泥で濁らせてどうどうと勢いよく、晴れの日は陽を受けて水飴状に光りながら穏やかに流れる。河川敷にはジョギング中の中年男性や犬の散歩中のカップルが歩いている。三月末から四月にかけて咲き誇っていた川沿いの、薄いピンクのしだれ桜、川の小さな中州や土手に咲きみだれていた黄金色の菜の花はともに季節を終え、いまでは新緑のつやつやした青い葉が川べり特有の大きい風に揺られて、ざわついている。

春の花の季節が終わったいま、鴨川からすぐ近くの京都府立植物園ではこれから何が見られるのだろう、と凜は不思議に思う。椿に桜に菜の花に桃に木蓮、水仙が終わり、町中からは鉢植え以外の花は消えた印象だが、植物園ともあろうものが、冬はしようがないとしても五月に花を絶やすとは考えにくい。③まさか、ツツジとか？ツツジはきれいだけど町なかの道ばたでも見られるからなぁ。吹く風に髪をもてあそばれながら、凜は歩いて十分ほどの場所にある植物園の情報を携帯で調べた。

薔薇だ！洋風庭園には約三百種類の薔薇が咲くとある。そういえば先月に植物園に行ったら、ありとあらゆる花が咲いているのを見られたのに、薔薇園だけは茎と葉のみで人気もなく寒々としていた。世界各国の（＊注２）プリンセスや（＊注３）風光明媚な地名から取った仰々しい品種名を読むのと、鮮やかに咲きこぼれる薔薇の花弁が大好きな凜は、さっそく姉たちを誘って植物園へ行こうと頭のなかで計画した。薔薇が見られるとなると、腰の重い綾香姉もすぐ忙しぶる羽依ちゃんも、北山の街の散策を兼ねて自転車で訪れてくれるだろう。携帯がポーンと軽い音を鳴らす。

『ハヤシライスの材料、買ってくれた？』

鴨川で一休みしているのを見抜いているがごとくの綾香からのメッセージに、そろそろ行かなくちゃ、と凜は名残惜しく空を見上げた。どこまでも広がる空は柔らかさを残したまま夕方を迎え、玉ねぎを炒めた［　X　］色に変化している。④デミグラスソース色へと変わってゆくさまは自転車に乗りながら眺めよう、と決めて凜は立ち上がった。いつか京都を発つかもと予感があってからは、この町のどの景色も目に染みる。⑤写真には撮れない故郷の優しい色合いを瞳の奥に、しっかり閉じ込めておきたい。

黄昏のなんとなく（＊注４）センチメンタルな時間帯には、一つのうろ覚えの曲が、⑥小さな気泡になって心の底から表面へと浮き上がる。うろ覚えなのは、母があやふやなメロディを歌っているのを聞いただけで、歌手が歌うのを聞いたことがないためだ。凜は自転車をこぎながら、風にまぎれて口ずさむ。

田舎の（ア）堤防　夕暮れ時に
ぼんやりベンチに　すわるのか
散歩するのも　いいけれど
よりそう人が　欲しいもの
まわりの暗さは　僕達のため
あの娘が来るのを　待っている
夕暮れ時は　さびしそう
とっても一人じゃ　いられない

「お母さんが高校の文化祭のときにね、廊下にいた三人組の男女がいきなり（＊注５）アカペラで歌い出したんよ。校舎内（＊注６）ゲリラライブ、ってとこやね。きれいなハーモニーの歌声で、（イ）カンソウの部分がオカリナやねんけど、三人組のうちの真ん中が縦笛を吹き出して、それが曲にぴったりの心細げな音でな。上手かったわ、忘れられへん」

当時ヒットしたらしいこの曲は、母が歌うと音程が低く平坦に聞こえた。ねんねんころりよの子守唄にも雰囲気が似ていて、⑦暗い曲調に夕闇に飲み込まれそうな不安を感じつつも、不思議と心が休

まる。夕暮れ時はさびしそう、と、“さびしい”と断定せずどこか他人ごとみたいに呟いたかと思えば、すぐ後に、とっても一人じゃいられない、と感情的に吐きだす。この不安定さは、逢魔がときとも呼ばれる夕方の心細さを経験したことのある人間なら誰でも、きっとよく理解できる。

ハヤシライスほど牛肉の質に左右されるメニューはない、というのが綾香の口ぐせで、凜が家に帰るとすでに深めのフライパンで近所の肉屋で買った牛のこまぎれに火を通していた。

「ただいまぁ」

「おかえり。トマトとマッシュルームは買ってきてくれた？」

⑧料理の際、家族内で唯一きっちりエプロンをつけて髪をまとめる綾香が、手を動かしながらふりむきもせず凜に尋ねた。

「買ってきた、サラダ用のレタスとクルトンもいっしょに。肉、早く炒めすぎやない？　硬くなるよ」

綾香は菜箸で肉を転がしながら、丸みのある横顔で微笑った。

「凜ちゃんがガレージに自転車を置く音が聞こえてから、フライパンを熱し始めたんやし、⑨だいじょうぶよ。鍋に水を入れて、沸騰させてくれる？トマトの湯むき用」

シンク前のテーブルにスーパーの袋に入ったままの材料を置いて、そのまま立ち去ろうとしていた凜は、綾香の穏やかだが有無を言わさぬ口調に⑩頭の向きを変えられて、しぶしぶしゃがみ込み十年選手の行平鍋を取り出して、蛇口から水を注いだ。夕食番は三姉妹で交替制だが、自分の当番の日ではなくともときどきこうして手伝わされる。まだまだ料理が（ウ）不得手の凜は、手順が分からなくなり台所で大騒ぎしては、度々綾香の知恵を借りるのだから、お互い様だ。鍋がぐらぐら煮立つと、姉の指示通り凜は洗ってへたを取ったトマトを三個、鍋に恐る恐る入れる。

「熱ッ」

湯にはさわっていないのに、熱い（エ）ジョウキが指先を取り巻いて、凜はあわてて手を引っ込める。

「お玉で入れればいいのに」

下味付けのさいちゅうで忙しい綾香が遅いタイミングでアドバイスを入れ、残りのトマトは玉じゃくしでゆっくりと沸騰したお湯に沈めた。

“私も主婦として定年を迎えます”と母が父の定年のタイミングでおごそかに切り出したとき、三姉妹はまったく意味が分からなかったが、つまりはそれが、二度と［Y］という母の宣言だったのだ。

「三人もの子どもの毎食のご飯、お弁当、ほかのお世話もすべて、母さんは大変がんばってやってきました。もう十分。名入りの包丁も重い木のまな板も、油の焦げ付いたコンロも当分は見たくない。これからは趣味の料理だけ、したくなったらします。朝と昼ご飯は各自で、お夕飯はあんたらで作りなさい」

話があります、とわざわざリビングに呼び出された三姉妹と父のうち、綾香だけが若干動揺して、口を引き結んだが、残りの家族たちはへっちゃらな顔をしていた。羽依にいたっては「話ってそれだけ？友達と電話してる途中だから、（オ）部屋戻るね」と座っていたソファの背を飛び越えて、二階の自室へ続く階段を軽い足取りで登っていった。

「⑪父さんはメイワクかけないから」

日ごろ家族内の四人の女に圧倒されて、かつ粗食をまったく（＊注７）厭わない父は、とりあえずそうつぶやいて、残った二人の姉妹の反応を見た。

「いいんじゃない。私もなるべく大学で食べてくるようにするし」

どこか浮き浮きした口調の凛と、感情を表に出さない綾香に母はため息をついて、長年使い続けてきたかっぽう着をたたんで、腕のなかでくるくると巻いた。

「なるべく、じゃなくて、毎度のご飯を自分で考えるようにね。私もときどき自分と父さんの分は作るけど、あてにせんといてね。あー疲れた、これで（＊注８）お勝手に立たなくて済むと思うと、人生が倍に広がったくらい、清々しい気分になるわ」

「母さん、おおげさ」

うんと背伸びする母の姿に、ソファにもたれたまま凜が笑う。

「母さん、いままでありがとう」

唯一ちゃんと礼を言った綾香と、続いてあわてて頭を下げた父に、⑫母は厳しい表情のまま、うんと一度うなずき、ため息をつきながら廊下へと消えていった。凜も礼を言いたかったが、ついタイミングを逃した。社会人の綾香にくらべて、大学生で母に手料理卒業宣言を下された羽依や自分は、かなり（＊注９）不憫なのではないかという拗ねた思いが、心をかすめていたからだ。かといって毎度夕食の時間を気にして帰宅を早めたり、今日は食べないと連絡し忘れて母に怒られる窮屈な日々に帰りたいとも思わない。自宅での手料理が当たり前の家庭で育った凜は、外食に憧れてさえいた。家にご飯があると思うと、あまり入る気にならなかったレストラン、身体に悪いと母に怒られ続けたファストフード、あれもこれも食べてみたいと凜の夢はふくらむ。学生食堂は安いわりに意外なほど美味しいから、昼も夕も利用してもいいかもしれない。

しかし半年も経たないうちに外食の濃い味に（＊注１０）辟易した凜は、同じ状態だった姉たちと一緒に、なんとか再び台所に立ってもらえないかと母に懇願したが、Z だった。長年の主婦友だちと趣味へ習い事へ（カ）コウラクへと出かける楽しみを覚えた母は、夕飯どきにちゃんと帰ってくることすらめずらしくなった。遊びだしてからというもの表情は明るくなり腹の底から笑い声を響かせるようになったので、家族も生き生きとした母を止めることができなかった。

母の面立ちは三姉妹の誰にもあんまり似ていない、というのが奥沢家や彼らの親族の長年の定説だった。しかし怒濤の三連続の子育てを終えて、食事作りの家事からも解放されると、厳めしい表情が柔らかくなり、無駄な脂肪が落ち、年月の蓄積から顔立ちの輪郭が削り出された。するとつぶらな瞳は長女の綾香に、うすい唇は次女の羽依に、ふっくらした頬は末娘の凜に似ていることが判明した。しかし母の太い鼻柱は、どの子どももやっぱり受け継いでいなかった。

そうしてぎこちない当番制の夕食作りがスタートした。凜は進学した大学院での研究の忙しさ、羽依は生来の料理嫌いから綾香ばかりが代打を頼まれる日々が続いている。綾香がただで引き受けるはずもなく、二人は晩ご飯の用意を代わってもらう度に綾香に三百円払い、回数を重ねると割と深刻に懐に響いてくるこの代金を二人

は⑬「夕食税」と呼んでいる。給料と夕食税とで綾香は結構貯めこんでいるぞと、家族たちは噂している。

以前食事の場で羽依が「将来のための結婚資金か」と綾香をからかったところ、⑭顔を真っ赤にして怒るという本気の反応が返ってきたので、以降奥沢家では夕食税の行方に対しての質問は禁句になった。

⑮綾香のハヤシライスは今年で六度目だ。

（綿矢りさ『手のひらの京』より）

文中に引用された歌は、N.S.Pの「夕暮れ時はさびしそう」（一九七四年　昭和四九年発表　作詞・作曲　天野滋）

注１　鴨川…京都市を南北に流れる川の名。後に出てくる「北大路橋」も鴨川にかかる橋の名前である。

注２　プリンセス…王女・皇女

注３　風光明媚…自然の景色が素晴らしいこと。またその様。

注４　センチメンタル…感傷的

注５　アカペラ…楽器を伴わない歌唱

注６　ゲリラライブ…予告や宣伝なしで突然行われる歌手などのライブ

注７　厭わない…きらわない

注８　お勝手…台所のこと

注９　不憫…かわいそう・あわれ

注１０　辟易…迷惑してうんざりすること

問一　二重傍線部（ア）～（カ）について、（ア）（ウ）（オ）の語句はその読み方をひらがなで答え、（イ）（エ）（カ）のカタカナは漢字に直しなさい。

問二　傍線部①「春から初夏にかけての何かはじまりそうな予感が、空の色にも溶け込んでいる感じ。」とありますが、凛はすでにある予感を持っています。その内容を答えなさい。

問三　傍線部②「家まで帰る途中」とありますが、凛は何の用事が

あって出かけていたのですか、答えなさい。

問四　傍線部③「まさか、ツツジとか？」とありますが、凛が「まさか」と思っている理由として最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　植物園のその季節の代表的な花が、どこでも見られるような花ではないだろうという思いがあったから。

イ　植物園で最も美しいと宣伝する花が、きれいだけれど町中の道ばたで見られる花だとは思えなかったから。

ウ　植物園を代表する花が、季節を問わずどこにでも咲いている平凡な花であるわけがないと思ったから。

エ　植物園が花を絶やさないために、季節外れでもきれいな花を無理に咲かして展示するとは思えなかったから。

問五　文中の空欄 X に入れるのに最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　カラス　　イ　ネズミ　　ウ　ウサギ　　エ　キツネ

問六　傍線部④「デミグラスソース色へと変わってゆくさま」とは、どのような様子を表していますか。最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　不吉な時間がやってくる様子。

イ　お腹がどんどんすいてくる様子。

ウ　本格的に夜になってゆく様子。

エ　雨雲が濃く広がってゆく様子。

問七　傍線部⑤「写真には撮れない故郷の優しい色合い」とありますがなぜ写真に撮れないのですか、その説明として最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　この色合いは凛がそのように思おうとしている色合いであるから。

イ　この色合いは凛の心の中で感じる色合いであるから。

ウ　この色合いは「京都」という土地でだけ見える色合いであるから。

エ　この色合いは食べ物の例えでしか表せない色合いであるから。

問八　傍線部⑥「小さな気泡になって心の底から表面へと浮き上がる」に使われている表現法を次から選び、記号で答えなさい。

ア　直喩（明喩）　　イ　隠喩（暗喩）　　ウ　倒置法

エ　体言止め　　オ　擬人法

問九　傍線部⑦「暗い曲調に夕闇に飲み込まれそうな不安を感じつつも、

不思議と心が休まる。」とありますが、なぜそのように感じるのですか、その理由として最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　「さびしい」と断定しない歌詞が自分の気持ちに合っているから。
イ　夕方の心細さと、歌詞のもつ不安定な感じがよく似ているから。
ウ　夕暮れ時はもともとさびしいもので、その通りにさびしいから。
エ　母が歌う低い音程では、どこか子守唄のような気がするから。

問十　傍線部⑧「料理の際、家族内で唯一きっちりエプロンをつけて髪をまとめる綾香」とありますが、この表現はどのようなことを表していますか。その説明として最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　食事作りに向き合う姿勢が他の誰よりも真剣であること。
イ　料理を何かの試合でもあるように集中して臨むこと。
ウ　食事作りが自分の本業であると自覚し、誇(ほこ)りを持っていること。
エ　料理をする身なりはこれが当たり前だと信じて疑わないこと。

問十一　傍線部⑨「だいじょうぶよ」の「だいじょうぶ」と同じ意味用法で使われているものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　「その荷物(にもつ)持ちましょうか。」「いえ、だいじょうぶです。」
イ　しっかり練習したからだいじょうぶよ。失敗しないわ。
ウ　わざわざ待ってもらわなくてもだいじょうぶだよ。
エ　地震にもだいじょうぶに作られている。

問十二　傍線部⑩「頭の向きを変えられて」とありますが、具体的には（1）どこから、（2）どこへ頭の向きを変えられたのですか。それぞれ次から選び、記号で答えなさい。ただしこの問題は完全解答です。

ア　台所のテーブル　　イ　台所の冷蔵庫　　ウ　台所の窓
エ　台所の出入り口　　オ　調理器具の収納場所　　カ　台所にいる妹

問十三　文中の空欄［Y］に入れるのに最も適する語句を次から選び、記号で答えなさい。

ア　家事は一切しません
イ　この家には戻りません
ウ　食事は作らない
エ　母親と思わないでちょうだい

問十四　傍線部⑪「父さんはメイワクかけないから」とありますが、この時の父の気持ちとして最も適するものを次から選び、記号で答え

なさい。

ア　母の言葉はもっともであると思い、それに自分は積極的に協力するが、娘(むすめ)たちが反対しないか気になっている。

イ　母の言い分はわかるが、それは本当に困ることで反対したいが、それには娘たちの支持も必要であるので、様子をうかがっている。

ウ　母の言い分に反発したいが、自分一人しか反発していないことを知り、娘に助けを求めている。

エ　自分は母からにらまれたくないし、諦(あきら)めるしかないが、娘たちがどう反応するか気になっている。

問十五　傍線部⑫「母は厳しい表情のまま、うんと一度うなずき、溜め息をつきながら廊下へと消えていった。」とありますが、この時の母の気持ちとして最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　家族のだれもが明確に反対しなかったことで、何だか自分のわがままを家族に押しつけたような、少しいやな気分になっている。

イ　家族のだれかが反対してくれて、「それじゃ考え直すわね」と恩を売ろうとしていたのに、あてが外れた気分になっている。

ウ　長女と父だけが自分に感謝してくれているが、次女と三女は全く感謝してくれていないことを知り、腹が立っている。

エ　手料理卒業宣言をしたのはよいが、料理を娘全員にきちんと教えていなかったことに気づき、不安になっている。

問十六　文中の空欄 Z に入れるのに最も適する語句を次から選び、記号で答えなさい。

ア　けんもほろろ

イ　立て板に水

ウ　水の泡(あわ)

エ　対岸の火事

問十七　傍線部⑬「『夕食税』と呼んでいる」に込められた二人の思いの説明として最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　やってもらっているのだから当然払(はら)うべきお金だと納得している。

イ　ずるいと内心思っているが、姉の権威(い)に負けて文句を言えない。

ウ　払いたくはないが、自分たちにはできないことなのでしかたない。

エ　くやしいが、いつかその元は取り返してやるぞと思っている。

問十八　傍線部⑭「顔を真っ赤にして怒るという本気の反応」ということから考えられる綾香の思いとして最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　結婚を意識している相手は実際にいるのだが、それを知ってか知

らずか、妹たちにからかわれたので怒っている。

イ　結婚する予定も、気持ちもないのに関係ない料理のことでからかいの種にされて非常に不愉快になっている。

ウ　優秀で男性からも人気ある妹に、自分が劣等感を持っている点をからかわれたのでくやしくて腹立たしい。

エ　妹たちのためにわざわざ代わってやってあげているのに、それをからかいの種にされるのは許せないと感じている。

問十九　傍線部⑮「綾香のハヤシライスは今年で六度目だ」とありますが、これはどれくらいの割合で出されることになりますか、次から最も近いものを選び、記号で答えなさい。またそのように判断した理由も書きなさい。ただしこの問題は完全解答です。

ア　月に一度くらい　　イ　月に二度くらい

ウ　二か月に一度くらい　　エ　月に三度くらい

二　次の――線を引いたカタカナを漢字に直しなさい。

（1）今日のカンチョウ時刻は夕方の五時だ。

（2）ヒツウな表情を浮かべる。

（3）白亜紀のチソウから出土した化石。

（4）賞品はコメダワラだった。

（5）そんなにコウフンするな。

三　次の――線を引いた漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

（1）これをつければ視野が広がるよ。

（2）これから裁きを受けることになる。

（3）何をやっても下手だなあ。

（4）憲兵がやってくる。

（5）臨海鉄道に乗る。

四　次の慣用句・ことわざの意味を後から選び、記号で答えなさい。

（1）元の木阿弥

（2）後の祭り

（3）足が出る

（4）左前になる

（5）諸刃の剣

ア　よけいなことをする。

イ　それまでの努力が無駄になる。

ウ　逆の結果になる。

エ　効果はあるが、自分にも危険がおよぶ。

オ　商売がうまくいかなくなる。

カ　結果として同じことになる。

キ　予算を超過する。

ク　時機をのがしてしまう。

ケ　残ったものにこそ良いものがある。

コ　わずかな工夫で効果があがる。

以上